

節分/鬼/絵本

川野 洋子

節分とは、四季それぞれの季節の分かれる節目。

立春・立夏・立秋・立冬の前日を節分という。一般には立春の前日をいう。

「鬼はそと～ 福はうち～」毎年、立春の前日に豆をまきながら疫鬼を追い払う行事である。子どもの成長を願い、今年も元気に過ごせますように、病気をしませんようにと大きな声で豆まきしたことを思い出します。

豆撒きは大晦日や七日正月に行うところもあるが、節分の晩、鬼やらい（《悪鬼すなわち疫病を追い払うことの意》「追儺(ついな)」）として撒くのが一般的である。

平安時代には、大寒に入る前日に、土牛・童子の像を作り、夜半に大内の諸門に立てて寒気を送り出し、立春の前日の夜に、それを撤去した。後世に行われている節分の鬼打の儀式は、古くから除夜に行われた追儺の転じたものである。

江戸時代、江戸浅草の浅草寺で、大晦日の追儺の式とにおいて節分の札と称する札を撒いた。そして、それを厄除けのために人々が争って拾ったという。

節分は、除夜から正月へ移る年の境目と同じように年の改まる日と考え、年越し・年取りとも呼んでいる。

現在、豆撒きは大晦や七日正月に行うところもあるが、節分の晩、鬼やらいとして撒くのが一般的である。各家では年男が大豆を炒って升に入れ神棚に供え拝んだ後下げ、表口に立って「福は内、鬼は外、福は内」と大声をはりあげ豆を撒く。鬼を打ち福を招き入れるという。豆は福茶として飲んだり、歳の数ほど拾って食べると病気をしないとか、保存しておき初雷の時食べると安全であるなどの伝承がある。寺社では追儺と称し、その年の干支に当たる人や厄年の人が年男となって、厄落としの豆撒きをする風が盛んである。

子どもの頃は、この見たこともない鬼が恐くて豆撒きをした後、窓や玄関から恐い鬼が来るのではないかという思いをしたことが何度もあった。

赤い顔をした赤鬼・青い顔をした青鬼。この鬼が恐い鬼だけでなく、やさしい鬼もいるんだと知ったのがいつからだろうか。

昔話や民話に鬼が登場する絵本で一番良く知られているのが「ももたろう」

「どんぶらこっこ～どんぶらこ～」や「 つんぶく かんぶく つうぶく かんぶく」などと桃が流れてくる様子をリズムカルに話が始まる桃太郎にも鬼が島にすんでいる怖い鬼が登場します。



「鬼」についての伝承は時代により地域により実にさまざま。中国では、鬼という漢字は死者の魂を意味し、日本でもこの世に怨みを残しつつ死んだ場合に鬼になると考えられた。それが仏教や陰陽道の影響を受けて妖怪として恐れられ、百鬼夜行といった自由な空想から、やがて角や牙をもった恐ろしい姿にイメージが統一されていった。

昔話に登場する鬼は、ほとんどこうした姿に描かれている。

しかし、鬼はただ恐ろしいだけの存在ではなく、異郷にいる鬼が落した宝は、主人公に幸福をもたらすのである。体のちいさい「いっすんぼうし」は、美しい娘を守るために恐れ鬼と戦った後、鬼が忘れていった打出の小槌を振って自分の体を大きくして美しい娘と結婚して幸せに暮らしました。と話が終わっている。

このような鬼の話には、時として異郷から里を訪れる神が、人間に幸せをもたらすという信仰の名残りを認めることができる。

そして、ぜひ読んでもらいたい絵本に「島ひきおに」「泣いた赤鬼」「だいくとおにろく」などがある。

「島ひきおに」はひとりさびしい鬼が、人間と一緒に暮らしたいと思って、自分住んでいるすみかの島を村まで引っ張ってきます。でも、その恐ろしい姿に、人間達に冷たい仕打ちをされてしまう。とてもせつない話です。

鬼がやっつけられて、めでたし、めでたしではないのです。鬼がわるものではないのです。

「泣いた赤鬼」は心優しい赤おにが、人間と友達になりたいと家の前に立て札を立てますが・・・だれも友達になってくれません。そんな赤おにのために青おには考えられない策を思いつきます。小学校の教科書にも載っていました。

この2人の鬼の純粋な心が胸を打ち涙した人も多いのではと思います。

「だいくとおにろく」は川に橋をかけることを頼まれた大工と鬼の話。目玉をよこせば橋をかけてやってもいいと言う鬼。「めだまあよこせつ」と恐れ鬼のようでもあり少しユーモラスな鬼から詰め寄られる大工。

でも、最後には、大工は鬼の名前を言い当てます。

もともと鬼という擬人化された怪物は、荒ぶる魂、荒ぶる神と同類の精霊で風の神とか雷神などは古くから鬼の形で想像されている。昔話の中に登場する鬼も、常に超人的なあらあらしい、時には人間が食べられてしまうような怖ろしい怪物として語られ、外から帰って来て娘の隠れている所で人間の匂いがすると言って怖ろしがらせる。

こういうイメージが順次積み重なっていくと、もう通常の社会にわたしたちと共存す

ることが不可能になって、深い山の奥とか海の向こうの島など、わたしたちと若干の距離を置いたところに 鬼の住居を設定するようになった。

山奥とした場合には古来伝承されている山の神の異様な形相や、山人の強い力とかそのうえに山岳修行の経験者の神秘さなどが加わった。

一方海上の孤島の鬼のすみか、鬼が島の場合には、それが財宝にみちた島であり、鬼征伐に行った桃太郎は、金銀サンゴを車につんで帰るということになる。

鬼の話はまだまだあるが、人間の心の中に潜む鬼ももっと恐い。昔から語り継がれてきた民話。地域や語り手によって少しずつ変わってきているが次の世代に語り継いでいくにはやはり、良い絵本に出会ってもらいたいと感じている。

- | | | | | |
|------|----------------|----|---------|-----------|
| 参考文献 | 『日本まつりと年中行事事典』 | 編者 | 倉林 正次 | 桜楓社 |
| | 『日本昔話事典』 | 編者 | 稲田 浩二他 | 弘文堂 |
| | 『島ひきおに』 | 作 | 山下 明生 絵 | 梶山 俊夫 偕成社 |
| | 『泣いた赤おに』 | 作 | 浜田 廣介 絵 | 梶山 俊夫 偕成社 |
| | 『だいくとおにろく』 | 作 | 松居 直 絵 | 赤羽 末吉 福音館 |

(かわの ひろこ 別府大学附属図書館)